住むことを学ぶ

――ハイデガー居住論とモダニズム建築――

稲田知己

ハイデガーはドイツ工作連盟主催のダルムシュタット建築展（1951 年）にさいして、『建てること、住むこと、考えること』と題された講演をおこなった。ここで「住む」とは、ヘルダーリン的な「詩的に住む」こととして理解されねばならず、つまり、大地のうえに、天空のしたに、神々の神聖のうちに、死すべき者としての人々とともに、住むことである。後期ハイデガーが「四方域（Geviert）」と名づけたこのような居住空間は、現代人にとってあまりに空想的と思われるかもしれない。だが、この大地に人が住めなくなる危機的状況があらわになるにつれ、「**住むことをまず学ばなければならない**」というハイデガーの提言はますます重要性をましているのではないだろうか。

「**住むこと**（Wohnen）」ないし「**居住論＝トポロギー**」は、かつて川原栄峰が力説したように、ハイデガー思想全体の核心である。ハイデガーの思想展開を前期／中期／後期に区分し、トポロギーを後期にのみ該当させるのは、皮相な解釈にすぎない。現在の文献状況からすれば、つぎのようにいうことができるだろう。すなわち、政治に無縁だったハイデガーがナチス加担へと決断したのは、まさに「詩的に住む」ためにほかならなかった。それがあえなく挫折すると、ハイデガーはナチズムの「**美的芸術**政治」とみずからの「**詩的**に住む」居住論とをはっきりと区別し、前者を後者によって超克しようとした。このことを本発表は、ニーチェ芸術論やシラー美学にかんするハイデガーの講義録やゼミナール記録を詳細に検討することによって、まずは明らかにしたい。

この「住む」というテーマはあまりに身近なためか、哲学の伝統のなかでまともに議論されたことがない。なるほどボルノウやグッツォーニ、メルロ＝ポンティやバシュラールやレヴィナスが「住む」について言及してはいるけれども、上述のハイデガーのように、思想家一生の一大事として「住むこと」がそこで論じられているわけではない。このような理由から、本発表がこころみたいのは、ハイデガー居住論をその「**時代**」という巨大な物語テクストから把握することである。すると風景は一変する。

ちょうど『存在と時間』が公刊されたとき、シュトゥットガルト近郊のヴァイセンホーフ・ジードルングで、**ドイツ工作連盟**主催の住宅展が開かれた。ルートヴィッヒ・ミース・ファン・デル・ローエ、ブルーノ・タウト、ヴァルター・グロピウス、ル・コルビュジエ、ハンス・シャローンをはじめとして、世界各国から著名な前衛建築家が招待され腕を競った。会場には無装飾で白い箱形の住宅が建ちならび、さながら**モダニズム建築**の実験場の観を呈した。たしかに、「**建てること**（Bauen）」、「住むこと」への新しい提案がここにはあった。

このときすでにグロピウスはバウハウスの校長をしていた。**バウハウス**（Bauhaus）は、ドイツ工作連盟とならんでモダニズム建築を語るうえで欠かすことができないものだが、グロピウスによって 1919 年にヴァイマールで設立された造形学校である。ときの政情によってデッサウ、ベルリンへと移転し、結局はナチスの弾圧によって 1933 年に閉鎖されてしまった。バウハウスはその合理主義的・機能主義的なデザインがしばしば批判されてきたけれども、けっしてそれにつきるわけではない。従来の建築様式の拒絶、あらゆる造形活動の建築（バウ）への中世ゴシック的な統合、芸術と技術との新たな統一、類型化による芸術と工業との融和、こうしたバウハウスの建築造形思想は、多様な理念が交錯する壮大な住居改革運動であって、それは、「**技術**」の時代に「住むこと」を考察するためにはきわめて興味深い。

さらに例をあげるなら、ル・コルビュジエは綱領的な『建築をめざして』（1923 年）において、「住宅は住むための機械だ」と主張し、「革命か、建築か」と訴えた。また、桂離宮を絶賛した『ニッポン』で有名なタウトは、ベルリンで多くの集合住宅を手がけたモダニズム建築家だった。それらはいまユネスコ世界遺産に登録されているが、そのなかの「ブリッツ馬蹄形ジードルング」（1930 年）は、建設当時、ドイツ社会民主党の選挙ポスターに利用されたことがあった。「建てること」は、激動の「**政治**」の渦中にあった。

最後に、本発表の趣旨を総括しておこう。**本発表の目的は、当時まさに勃興しつつあったモダニズム建築とハイデガー居住論とを対決させることによって、「住む」という事柄を学び考えることである。**このような発表内容であれば、技術や政治をからめた具体的な議論がフォーラムの場で期待できるだろう。本発表の結論をすこし先取りしておくなら、ハイデガー居住論の根本動向が大地・天空・神々・人々の四者をたがいに「思いやる」ことであるかぎり、「住むこと」の**倫理性**を最終的に問題にしなければならないだろう。